生環境構築史学(History of Habitat Building)のための日英併記による研究発表と内外先行研究者への現地取材記事に基づく研究蓄積を目的とした編集広報基盤の確立と運営

中谷礼仁※1　松田法子※2　青井哲人※3

概要　みずから環境を作り出そうとする側面から人類史をとらえ直す生環境構築史(History of Building Habitat)を展開するための、日英併記を基本としたメディア運営と成果公開を開始した。建築領域から出発し、国際的起爆力をもつ学際研究の中心軸を形成する。運営においては、学際的な編集同人を立ち上げ、関連分野からの発表の場をつくり議論を推進した。かつ先駆的な関連研究者を対象にした取材を行い、本申請独自のコンテンツの充実を図った。これら中心的コンテンツは蓄積され、以降、書籍・国際会議・エキジビション等への展開が図られる。助成期間内に特集計 4 号を発行した。

研究背景と目的　地球環境の持続が叫ばれる現在において、その持続と将来像は科学的、工学的解決のみならず、人類が作り上げてきた環境の方向性を見据えるための、骨太な歴史的視点が必要である。それが生環境構築史である。「生環境」（Habitat Building）とは地球環境そのものではなく、むしろ人類が主体的に構築した、原始から現在に至るまでの人為的環境のことである。その代表が建築・集落そして都市である。建築・都市領域をこのような人類史の中心として意識的に扱おうとする研究の枠組みは、本申請者である中谷と共同研究者である松田、青井によって初めて構想、提起された。人類における生環境の獲得過程を歴史的に分析することで、将来の生環境構築へ向けての具体的提言が可能となる。

・生環境構築史について

本研究は地球-人間環境の適正化をめざした学際研究活動を、特集形式の Webzine 媒体を作り、同人(研究遂行者)の検討を元に、リアルタイムに関連研究者に寄稿等を依頼することで研究の活発化、新ジャンルの萌芽的形成を目指す活動である。研究体制の総合的方向性を私たちは生環境構築史 **Habitat Building History（HBH）** と名付けているので、それについて概略する。

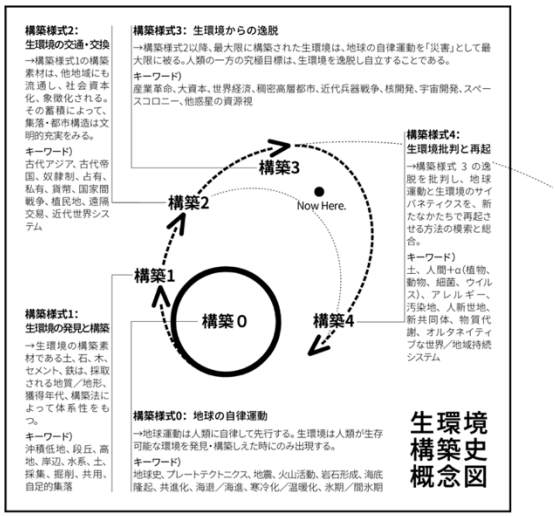

図１　生環境構築史概念図（日本語版、

※1　早稲田大学教授　※2　京都府立大学准教授　※3　明治大学教授

生環境とは、人類が自らの持続的生存のために構築した環境の全般を指す。住居・集落・建築・都市・農地などは生環境の具体例である。それら生環境の史的段階を「**構築様式**」と名付けた（図１参照）。それは建築・集落・都市等の人為的環境の構築手法の歴史的展開を検討する指標である。

まず生環境の資材は、地球（**構築 0**）の自律的運動の結果によって人類に提供される。人間社会の構築様式の前提に、社会発生以前の自律的な地球活動を据えることはHBH の重要なコンセプトで、これは歴史的世界像の画期としての生産様式（マルクス）や交換様式（柄谷）には、大きく含まれていなかった領域である。**構築１**は、構築０で発見された構築素材が、人類の生存特性に根ざしてその場で即地的に用いられた原始的段階である。**構築２**とは古代文明に象徴されるような、構築素材の交通・交換を伴う集積段階である。**構築３**とは、特に産業革命後顕著になった、地球（構築 0）を人類発展のための消費資源とみなすような産業段階である。なお各様式による生環境は歴史的であると同時に、現地球上で複合的に併存する。生環境構築史では構築３が肥大する現在を含めた歴史段階を批評的に検証し、持続可能な地球と人類の関係を再獲得するための「**構築４**」を構想している。そこから現代の生環境を検証すると共に、構築４の理論的・実践的具現化について議論する場をつくりたかったのである。そのため日英（部分的には中国語）併記のウェブ媒体を作り、世界の知者との討議と連携を行い、またそれらの過程と成果を発信・蓄積・共有することが目的となった。

活動内容

そのために以下の研究活動を行った。

①Webzine の発行　生環境構築史の確立は萌芽的段階であり、申請者ならびに共同研究者によるこれまでの確固とした研究に裏打ちされながらも、その可能性が十全に社会に認知される直前の段階である。それと同時に、生環境構築史に再編成されることでその研究成果の独自性を増幅する先行関連研究が多数存在する。これら将来性のある諸研究を生環境のコンテンツとして、編集同人制にもとづくエディターシップによって編集し広報することは、生環境構築史の確立のためにはきわめて効果的である。それら諸研究を結び合せる研究上の重要な過程として Webzine を発行した（6 年間計 12 回発行予定、https://hbh.center）。これらには、本研究独自の取材記事（③参照）、編集同人による記事、グラフィック、同人の呼びかけによる寄稿が含まれた。

②複数領域にわたる同人制の採用　編集同人は工学系のみならず人文領域をも含んだ学際的検討が可能な人選とした。具体的な同人（研究遂行者）は地球科学（伊藤孝）・土壌学（藤井一至）・環境史学、社会運動史（藤原辰史）・建築史-都市史学（松田法子・中谷礼仁・青井哲人・マシュー=ムレーン）・建築学（日埜直彦）・芸術学（平倉圭）・美術（小阪淳）によって構成した。これら同人が年 2 回発行の特集ごとに明確なエディターシップと編集責任体制を持った。

③関連著名先行研究者への現地取材　生環境構築史自体は誕生まもない構想であるが、その構想に大きな影響を与えた既存領域における生環境的フロンティアたちが存在する。本活動に関連する先行研究は建築領域のみならず、その土台である地球物理学や人類生存に関わる社会学、さらには将来を見据えた環境創造・空間学の構築にまで関連する。これらを生環境の名の下に結集させることで、学際的かつ包括的な各分野の交流が活発化することが期待できる。

本研究組織においては、内外を問わずそれら先行研究者へのインタビューを行なった。特に彼らの研究現場は、それ自体が構築 4

像への示唆が大きいと考えられるため、その具体的紹介を必須とした（本申請時期にあたっては他助成とともに実行、また COVID-19 のため ZOOM にて現地とオンラインで繋いで取材、研究現場についても確認、図版資料提供の便宜をもらった）。2020 年度後半は他財団による助成があったため、窓研究所にその事情を連絡し 2021 年度までの助成延長をいただけることになった（助成金額は変わらず）。その結果、順調に研究成果を構築することができた。

研究成果と考察

現在（2022 年 4 月 15 日時点）にて既に 3 号の特集と次号特集の公開が目前である。以下にその概略を説明する。

・第一特集「SF 生環境構築史大全」（2020.12 発行）：生環境構築史概念の深化のため、これまでサイエンス・フィクション（Sci-Fi）によって描かれてきた未来像を通史的に検証した。キーワードは、構築０の住み方、外宇宙・内宇宙、エネルギー、非人間、科学など。公開後様々な分野から反響をいただいた。寄稿者は巽孝之（アメリカ文学史、慶應大学）、石橋正孝（フランス文学、立教大学）、樋口恭介（SF 作家）等 6 名＋編集同人である。

同特集においては、サイエンスフィクションから生環境構築史概念の捉え直しのための Sci-Fi 文学にて展開されてきた諸テーマの発展史ならびに各国の現代 SF 文学が紹介された。

・第二特集「土政治 —10 年目の福島から」（2021.2 発行）：地震という構築０の自律的運動の顕現に、モンスター化を遂げていた構築３が暴発したともいえる福島の原発事故から 10 年が経つ。HBH では 10 年目の福島に立って「土」に注目し、生環境の必須要素である土に起こった事柄を政治から実際の施工作業のレベルに至るまで報告を試みた。結果として無機と有機、物質と生命を架橋する土のありようと構築０～４との関係史を考察した。キーワードは、土の誕生、土と文明の関係、土と内臓、土と資本、大地の多重化、土と共同体など。寄稿者はアン・ビクレー＋デイビッド・モントゴメリー（生物学者＋地質学者）、蟹澤聰史（地質学・地球科学）、溝口勝（飯館村村長）、小塩海平（東京農業大学）、洪申翰（台湾立法委員）＋編集同人である。

・第三特集「鉄の惑星・地球」（2021.11 発行）：質量比で地球（構築０）最多の元素である鉄は、構築３世界を成立・拡張した最大の構築素材である。しかしそれはヒトを含む多種多様な生命を駆動する必須元素でもある。地球それ自身の構築運動の中核にあり、かつ人類を含む多様な生命の原動力でもある、魅力的かつ根本的な物質「鉄」に注目し、これを通じて超長期的時間から構築様式を俯瞰した。キーワードは、宇宙史、シアノバクテリア、アナトリア、稠密高層都市、「鉄のエコロジー」。寄稿者は大村幸弘（アナトリア考古学研究所）、高萩航＋北台紀夫（東京大学、海洋研究開発機構）、酒井宏水（奈良県立医科大学）、長沼毅（広島大学大学院）計 5 名＋編集同人である。

・第四特集「構築 4 の庭」（2022.04.28 発行予定）：人間と自然との相互関係について構築 1～3 を通覧できる場として、庭をとりあげた。庭は人間が植物など他の生き物と持続的に関係するための技法であり、比較的小さな範囲でその関係を実験的に模索する場でもあることから、構築 4 の展望のヒントを得る格好の題材たりうると考えたのである。キーワードは、庭以前（定住以前の人間と自然の関係）、極小の庭（構築 2 以後の人間-自然関係の凝縮の技法）、前衛の庭（構築 3 の桎梏のなかに生存の回路を回復する政治的対抗）、再野生化の庭（人為的な介入を契機に人為以前の自然を自生的に創出す

る実験)。寄稿者は、藤田祐樹（旧石器考古学)、依田徹（日本美術史）らと編集同人である。

考察

本研究の活動では、同人編集会議によってトピックを多角的に掘り下げて新たな包括的視点を獲得し、また寄稿、インタビュー依頼を通じて国内外の先端的研究者・実践者との連携を構築し、両者の生産的・積極的な交差が Webzine において公開され、新しい読者層を生成した。この 3 段階のそれぞれに新たな知見や気付きが生じたことを以下具体的に述べる。

・同人編集会議における包括的視点の獲得

本 Webzine 活動の目的は、構築様式による世界史の再検討と構築 4 の世界像の提示である。これらについて同人による共通理解は深く、会議でのトピック構築は発見的に機能した。SF から学ぶ生環境像（第一特集)、土の扱い方からみた原子力発電所事故後の被災地域の問題と解決法（第二特集)、生命から都市まで遍在する元素としての鉄、ならびにその広範な機能の提示（第三特集)、すでに展開された局所的構築 4 像としての庭仮説（第四特集）など、従来の諸説をベースとしながら生環境概念を加えて再構築したトピック群を提出できた。

・国内外の先端的研究者・実践者との連携

各特集でインタビューを行なった先駆的研究者の生環境的再構築も、インタビュイーの同理念についての素早い理解があり予想以上に展開した。SF 史を生環境構築史に接続した巽（アメリカ文学）は、構築 4 にはテラ・フォーミング（他惑星の地球化活動）をむしろ地球に行う「再地球化」の概念が必要ではないかという発見的提示があった。構築 4 が単なる回帰的復古運動に陥らない柔軟性を確保するための示唆となった（第一特集)。モントゴメリー（土壌史）は彼のパートナーである生物学者アンとの庭づくりの体験を学問領域に投影していく過程が具体的に紹介された（第二特集)。大村（考古学）はトルコのカマン・カレホユック遺跡で 40 年近く継続している編年的発掘作業の実際と鉄器文明の誕生の世界像についてその出土品から論じた。さらに人新世に対する積極的批判があった（第三特集)。

・新しい読者層の生成

Webzine が公開されると、その広範な視点はまずキュレーターや雑誌編集者たちの新発想源として参照されるようになった。いくつかの紹介や提案があったが、その中で実現したのが、小松左京特集における SF 小説の寄稿(『現代思想』2021 年 10 月、同人中谷＋松田＋小阪)、展覧会 2121 年 Future In-Sight 展（2021.12-22.05、同人日埜）である。これらのように生環境構築史は新たな理念として社会でも認知された。

・達成できなかったこととその理由

ただしその理念が通常の読者層にまで浸透したかについてはやや疑問が残る。メディア発行のみならず、生環境構築史という新たな概念に見合った勉強会やシンポジウム等のより実地な活動をも提供すべきである。また先行研究者へのインタビューは現地へ赴き、彼らの研究環境をも紹介する予定であったが、コロナ禍のため現地取材は果たされていない。しかしながらオンライン中心の取材においても、未公開写真の提供などがあり、内容としては遜色のない仕上がりが保持できたと考えている。中期 HBH の展開のために、本申請期間までの活動をベースに、さらに展開していく所存である。改めて貴財団に本活動のスタートアップをご支援いただいたことに感謝する。